

お知らせ・報告コーナー

下記のような新聞での申し込みを募ったところ、希望者多数のため、「神戸文化（中）ホール」へ、会場変更しました。実行委員会は、楽しい「会」が成功するよう、現在準備を進めています。

春休み子ども劇場 観劇希望者を募集

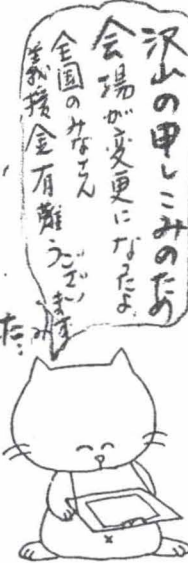
来月26日、シーガルホール

全神戸市教職員組合など六団体でつくる「子どもたちに豊かな文化を」実行委員会は三月二十六日午後二時から、神戸シーガルホールで開く「春休み子ども劇場」の観劇客を募集している。向教組は全国から贈られ必着のこと。

た義援金を元に、昨年末にボートアイランドの市立港島小でコンサートを開き、二百人ほどの親子が参加した。今回、さらに幅広く、親子で楽しい一時が過ごせるようにと子ども劇場を企画した。

劇は学校公演を続けている劇団コロロの「まよいねこのもり」。主人公の女の子「ななこ」が行方不明になった飼猫の「けむり」を探しに出かけ、猫たちの世界に迷い込んでさまざまな体験をしていく。

定員四百五十人。応募多数は抽選。観劇料二百円。申し込みは往復はがきに住所、氏名、電話番号、応募人数を記入の上、〒650-0011 神戸市中央区下山手通四ノ三ノ九、全神戸市書記局内、同実行委員会。二十八日必着のこと。



震災3周年

「市民教育講座」

学校と子どもの現在を考えた…

「震災を契機として学校教育に望むもの」をテーマにしたシンポジウムが二十四日、神戸市中央区の私学会館で開かれ、教師や父母ら約六十人が意見を交わしました。

全神戸市教職員組合、新日本婦人の会など七団体と「市民教育講座実行委員会」が開いたもの。落語家の露の団六さんをコメディエーターに三人のパネリストが発言しました。

小学校教諭の池見宏子さんは、「復興」によって、管理と競争によるゆがみが学校現場にもどってきたこと、一方いまなお校区外からの通学をよぎなくされる生徒がいる実態などを紹介。長田中PTA会長の榎原実さんも、子どもたちの生活に影響を与えている、被災地の生活再建の困難さを指摘しました。

弁護士渡部吉泰さんは、震災の経験を知識化し、学校で子どもたちに教えてほしいなどと要望しました。

参加者をまじえて、「荒れる」学校現場の現状や、これにたいする教師や父母のとりくみ、教育権を国民の手にとりもどすための方向性など、幅広く議論が交わされました。

父母・教師ら
シンポジウム
神戸



第4号…記事のお知らせ

- * 「教師の職務」について…p1
- * 悲惨な記憶をどう受け止めるか?…p2~4
- * 妹を亡くした私が今言えること(手記)…p3・4
- * 被災地の子どもたちは今…p6・7
- * お知らせ・報告コーナー…p8 (8)

被災地だより これ以上人災による犠牲者を出さないために
強力な絆を避難所になった神戸の学校現場から全国へ

絆



第4号 1998・3・17

全神戸市教職員組合「絆編集係」
神戸市中央区下山手通
4・13・9中尾ビル3F
TEL-078-391-7508
FAX-078-391-8549
〒振込口座番号 01170-7-29732

避難所運営を 教職員の職務にしてはならない

兵庫県は下記のように、「避難所運営は、教職員の職務とする」と発表しました。私たちは、このため新たな避難所運営に関わるマニュアルが押しつけられ、唯でさえ子どもたちに向かう時間が少ない中ますます忙しくなる事に、憤りさえ感じます。



1998年(平成10年)3月3日

避難所運営は「職務」

教員の大災害対応で兵庫県

全国初、手当を新設

条例改正提案



震災の教訓は、
学校が子どもたちにとって
「安全と安心・成長」の拠点に
なること。

(1)

震災直後、多くの教師が避難所運営に追われ、子ども達に関われなかったことが、今なお多くの子ども達の心のケアが必要な状態を続ける結果になっているのです。

この教訓を生かすため、教職員が、避難所運営からできるだけ早く解放され、「子どもたちの安全と安心を保障する取り組みに専念できる事」を本務とするよう強く訴えます。

(p2県・市の調査による)

悲惨な記憶をどう受け止めるか？

(子どもの心の調査より)

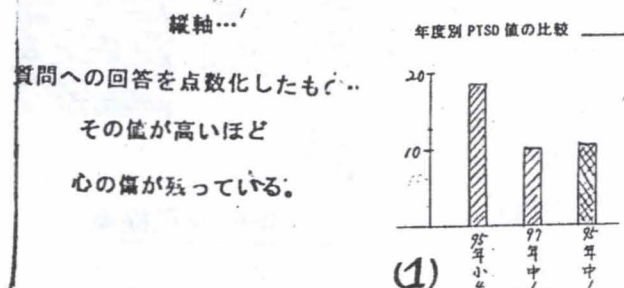
震災3年を経て、NHKは被災地での子ども達の震災で受けた心の傷の変化、それをどう受け止めるかを特集しました。その内容の概略を紹介します。

(災害時における子ども達の対処、その後の指導のあり方を考える参考にして下さい。)

今なお

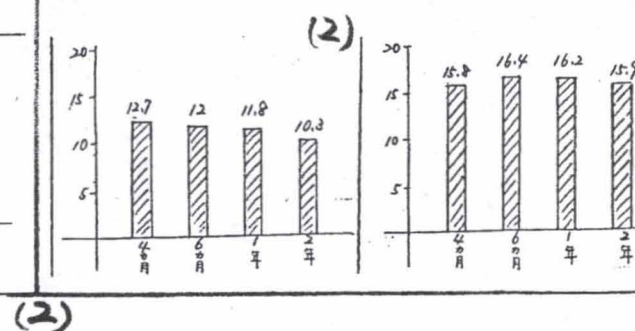
「心の傷は癒えていない」

兵庫県教育委員会は、被災地で震災を体験した小・中・高170人を対象に、1995年～1997年の3年間の心に受けた傷の変化「災害弱者の疾病症状(PTSD)」を調査しました。その結果、小学生が一番傷を受けやすいけれど、その回復力も早い事がわかりました。しかし3年経っても(当時の同じ年代と比べて)今も、高い数値を示していることがわかります(グラフ1)。つまり子ども達の中に、3年経っても、心に受けた傷を処理し切れていない子どもがいるのです。それは、異常な体験に対する正常な反応でもあるのです。死ぬような目にあった人であれば、条件が揃えば簡単に現れる症状であり、それだけに、個々の子ども達の災害時の状況をできるだけ知っておくことが望まれます。



ふえる「体の不調・鬱状態」

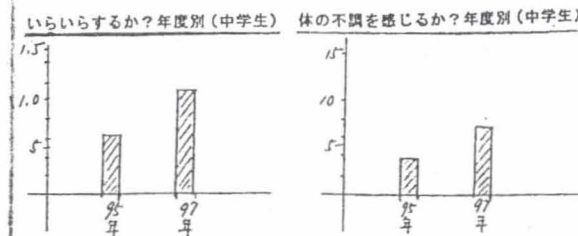
神戸市教育委員会では、被災地の小・中学生1万人を対象に、「心の傷」の変化を調査した結果、恐れや不安については、4ヶ月から値は減って感じなくなっています。しかし体の不調や鬱については、4ヶ月より6ヶ月がピーク、そして4ヶ月より2年後の方が高い結果が出ています(グラフ2)。恐れや不安は最初の直接の反応で早くおさまりますが、時が経つにつれ、疲労感が増し、思いを巡らす中で具体的に浮かんできたことが、体の不調をきたすようになるのです。子ども達は自らの体験を、忘れよう、健気に封じ込めようとするのですが、それがかえって、心の揺らぎの材料になる恐れがあります。



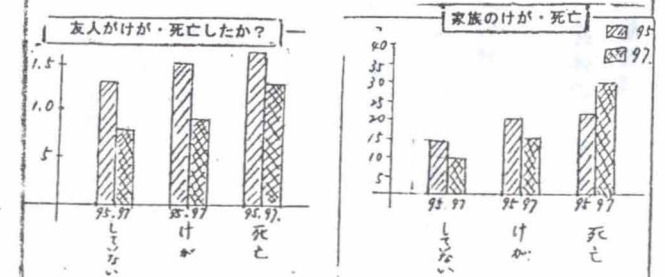
「時間が症状を熟成させる

現象」

「いらいらするか?」「体の不調を感じるか?」について、各年度別に、中学生に尋ねた結果、(グラフ3)のように、時間が経つにつれその感じる度合いが増えています。外傷的体験を受けると、その当時は、ボーっとする(懷疑)状態ですが、それがイライラ等身体的不調にまでくるには時間がかかることがわかります。そのことを「時間が症状を熟成させる現象」といいます。



身近な人が、被害を受けた場合、時の経過とともに心はどのように変化するか調査した結果、それが友人の場合は、時の経過とともに徐々に癒されていますが、「家族の死亡」に限っては、時の経過とともにかえってその心の傷は増す状態になっていることがわかります(グラフ4)。家族の場合、信じられない状態が続く、時間が経たないと心の中に「家族の死」という厳しい現実を取り込めないためと思われます。今後ますますそのケアの必要性が考えられます。



子ども達との関わり

子ども達の体験が個々により差があり違いが大きいので、震災のことについてはなかなか触れることが難しく、関わることに葛藤している教師が多い現状があります。しかし関わりながら、反応を示したときどう対応するかを考える事が大切といわれています。心に傷があるのにふたをしてしまっ、表面上明るく振る舞う場合があり、その方が深刻な事態を生む結果になりやすいのです。

子どもの視点に立って

多くの子ども達が、対象喪失といって、その子にとってかけがえのないものを失っている場合があります。例えば、震災の被害の大きいところでは町の風景が変わってしまい、子どもの視点に立てば、自分の幼い時の風景・歴史がかき消される喪失体験をしている場合があります。被災体験時が幼い場合、特に本人が気がつかず過ごしがちですが、そのPTSDの現れ方に気をつける必要があります。

「心のケア」は、 「平和のバロメーター」

災害が起きてからのフォローアップではなく、「防災教育」の大切さを言っていました。それが「普段からの人間関係・学校が子どもたちにとって普段から安心と安全・成長の場であるかどうか」の大切さであり、今回の教訓を生かすことの大切さであると感じました。そしてこの

ような大型災害だけでなく、交通事故・家族の死・火事など個別災害にであった子どものケアも大事なのです。日本ではそんな場合、今まではお見舞い・お悔やみ・お花等でその当事者への慰めの心を表していましたが、常に、個別災害でも大型災害でも専門的な「心のケア」を保証する事が大切であり、それがどれだけ保障されているかが、実はその社会

の平和のバロメーターでもあり、その社会の「心の豊かさの証」でもあるのです。



本当の復興とは

そして最後に「本当の復興」は、町が新しく生まれ変わるのではなく、災害を受けたものが、そのつらい体験から解放された時であるといっていました。この番組を通して、今までの復興のあり方が問われたのと同時に、これからの復興のあり方を考える貴重な問題を提起されたように思います。

妹を亡くした私が、 3年経って、今言えること

現在高校3年（当時中学3年 加藤いつか）

家族のこと

震災から3年の月日が流れ、私たち家族の生活が変わりました。昔は優しい母も、厳しかった父も、3年前のあの日から変わりました。母は病氣と自分のことで精一杯になり、あまり私の方を見なくなりました。父は性格的に穏やかになつたように思えます。妹が亡くなって3年、まだあの震災は私たち家族の心に大きな傷を残したままです。

聞かれるのがつらかった「妹のこと」

この3年間で私は、表面的には変わっているように見えるのが大変でした。昔からの知人達は、私が震災で妹を亡くしているのを知っているのであまりその事に対して触れず、今まで通り普通に接してくれます。しかし高校に入學した頃にできた友人はどうてもいその事は知らずに、家族のことを聞いてきます。そして私が震災で妹を亡くしたことを言うと、ほとんどの場合「ごめん」「悪いこと聞いた」などと言ってきます。そして必ずと言っていいくらい同情の目で見ます。初めの頃は何かそのことがとてもつらく、苦痛に思えました。その事にだいいぶん慣れてくると、私はだんだんと嘘をつくようになりました。「姉妹は何人？」という質問に対し「一人っ子」と、答える事が多くなり、バリア意識というのか、自分の心の中に他人をあまり立ち入らせないようになり出しました。そして自分で心を許した人にしか真実を言わなくなりだしました。そうでもないし何だか必要以上に気を遣われるのがとてもいやだったのです。私としてはみんなと平等にしてほしいのですが、なかなかうまくいきません。それは、今もあまり変わりません。

ストレスから病院通いに

そして結果としてバリア意識が強くなったというのか、他人に自分の心の奥まで見せなくなり、そのうちにだんだん自分の部屋ですら落ち着かなくなり、ストレスがどんどん溜まり、体に表れました。不眠、イライラ、感情の起伏が激しくなり精神科に通院することになりました。特別に何をする訳ではなく、ただいろいろ話をするだけですが、その時だけは不思議と安心感を覚えました。しかしそれだけでは済まず、次から次へと心の病は私たち家族をむしばみ始めました。今も私を苦しめています。

私の心が落ち着く場所、「震災資料館」

でも私にとってうれしいことがあります。それは、妹の通っていた小学校に、震災の資料館があることです。普通、人が亡くなっても、遺影や遺品は家族の元に残りませんが、私の妹は小学校の資料館にもいます。初めのうちは資料館の役割など大したものではないと、思っていました。ところが今年の1月17日に久しぶりに資料館を訪れました。今までは震災の日が怖くて、学校の記念行事ですら出られない状態でしたが、今年は不思議と落ち着いて迎えられたように思います。考え方が変わったのかも知れません。そう、妹はこの資料館で忘れられることなくその小学校での歴史の中に加わった、そんな感じでした。しかしそれと同時にその日から私の感情の中から「泣く、悲しみ」というのが消えてしまいました。まるでつきものが落ちるかのように。しかしまだまだ心と身体のバランスがとれません。多分この心の傷は一生私についてまわるような気がします。

加藤さんは、被災当時我が子を亡くして悲しむ両親を見て、自分が頑張らなければと思いい、自分の弱さをできるだけ見せず明るく過ごしました。でもそうすればするほど、身体が思うようになくなったようです。

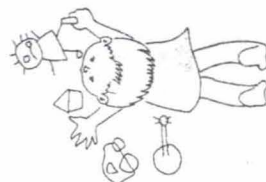
今は、身体の治療を受けながら、持ち前の明るさを生かして、将来お年寄りの世話もできる「看護婦」を目指し勉強中です。



被災地の子どもたちは、今

前ページの「NHK 特集」のなかの、県教委、市教委の行った調査の結果でもわかるように、「心のケア」を必要とする児童生徒が急増しており、「体の不調や鬱状態」になる子ども達が増えています。

二次的ストレスの影響



時が経つにつれ、直接的な影響は少なくなっているものの、復興の格差が広がり、相次ぐ転居、転校、親の失業等で、子ども達を取り巻く学校・家庭の環境が大きく変化、二次的なストレスが引き金になっているケースが目立っています。(97年11月県教委発表・被災地便り2号参照)。

その傾向を裏付けるように今、被災地真ただ中の学校は、震災丸3年経っても、まだ校区外通学をしている子ども、校区外の仮設住宅から通っている子ども達があり、復興が進まない困難な状況に加え、新たな事態が進行中です。震災前の児童数平均3学級あったクラスが、地域の復興が進まないため、年度始めは、40人ぎりぎりの2学級でスタートし、年度途中予定外の転出入が多く、40人を越えるクラスが3学年(5割)に上る学校が出ました。そして再び年度末には減少するため、全体としては元の児童数に回復しない状態です。

ふえる年度途中、突然の転出入



その途中転出入の児童も、必ずしも元いた児童ではない上、それぞれに大きな問題を抱えた場合の方が多くなっています。親の養育義務が果たせず、施設から通うようになった子ども、突然夫婦のトラブルから居所を知らせないまま、転出入する子ども、やっと元の学校に戻ったものの、時の経過を経て気持ちが合わず、不登校になりがちな子ども等、全国的な厳しい競争・管理社会が蘇る中でますます落ち着かず、ストレスをため荒々しい言動でトラブルを起こしたり、体調を崩しやすい子どもが増えています。いっどこで、学級が荒れても、そして自ら被災者が多い教師自身の健康が犯されてもおかしくない現状です。

一人一人に関わる取り組みが必要



そのような中でも、地道な取り組みで、普段荒っぽい言葉を吐いてストレスを発散させていた子どもが、震災3年経って、みんなで当時を振り返る中で、自分の妹の死を「……妹が死んだなんて知りませんでした。やいておこつを見る時、ドキドキしました。なきすぎて、目がいたくなりました。」と書き、その胸の内を見せるようになったり、震災直後不登校になった子どもが、3年経ってやっと親から少し離れて行動できるようになる等変化も見られます。

しかし大半の子ども達は、当時からありのままの自分を出すゆとりがないまま生活しており、いつまでその頑張りが続くか心配です。県教委も震災による心の傷は誰でも持っており、いつでも対応できる現場の必要性を訴えています。

十分な時間的人的ゆとりがほしい



新たな防災マニュアル・防災教育の研修・現場の実態を無視した「押しつけ教育改革」・「トライ・やるウィーク(押しつけ・課外活動)」等で現場をますます忙しくするのではなく、復興教員をその学校による自由な裁量で、大幅に受け入れ、何より30人学級の実現等、普段から学校が「安心と安全、成長の拠点」になるために、昨年発行した「学校防災・神戸からの提言」による震災の教訓を生かした取り組み、十分な時間的人的ゆとりが望まれます。

次号より、連載のお知らせ…「神戸からの提言」

今後ますます真価を発揮する「学校防災・神戸からの提言」の中身について、この紙上で紹介していきます。是非それぞれの学校づくり、町づくりに役立てるためご検討下さい。

次号発行予定…5月17日

(隔月17日・年5～6回)

感想・記事等お寄せ下さい。

データーで見る被災地の現状(現在)

仮設での孤独死(3・14) 199名

仮設住宅入居者(3・1)

兵庫県・2万3132世帯

(内、神戸市・1万5907世帯)